

自らに嘘をつかず

太田 哲夫

五十九回目の誕生日を過ぎ

遂に還暦へのカウントダウンが始まって

私は愕然とした

自分が納得した筈の

否

納得させた筈の五十九年間で

実はそうではなかった事に気が付いたので

紆余曲折の五十九年間で

普通の人とは少し違った道を行っただけだと

他にも思い通りの人生を送っていない人もいると

自分だけが不本意な人生を生きて来た訳ではないと

心の中でクリアしたつもりだった

三十代の初めに中学校教師を

教え子や教師仲間迷惑をかけたまま

追われるように逃げるように辞めた時

最後に仲間の教師達の前で挨拶の一言を口にした時の悔しさは

未だに心の奥にドロドロと渦巻き

生涯澱のごとく記憶の底に残るであろう

最も私の事を愛し心配してくれた母を残し

親不孝にも

たった一瞬だったが
ホームに進入して来る電車に
フラフラと吸い寄せられそうになった事も忘れていない

夜の新しい仕事の為に乗った電車内で
一日の仕事を終えて安堵している人達の顔を見て
何故自分だけがと
虚しさを超えて彼等に憎しみさえ覚えた

何も清算されていないじゃないか
数少ない今でも私を信頼して下さる方々に
ある年齢となり見えて来た事もある
理解出来た事もある
だから

過去は過去として未来に目標を持って生きると
特に教え子達には
自分のこれからの生き様
そして死に様を見せてやると豪語したではないか
あれは嘘だったのか

分からない自分でも分からない
でも一度口に出した以上やらねばならない
だから私はやる過去の重荷を背負ったまま
泣き言を言うかも知れない
それでも私はやる

それが
過去、現在、未来と続く私の人生だからだ
他人にどう思われ様と関係ない
自分の正しいと信ずる人生を生きる

過去の苦い体験がプラスに作用する可能性もある
だから

世界中にたった一人しかない私の
たった一度の人生を生き抜く

出来得るならば自分の信ずる道を真っ直ぐに
そして最後には

自分の記憶に残っている限りの
一生に起こった出来事と

出会い別れた人達の事を

全て胸に抱えたままこの世を去りたい

人生にリセットは無いから